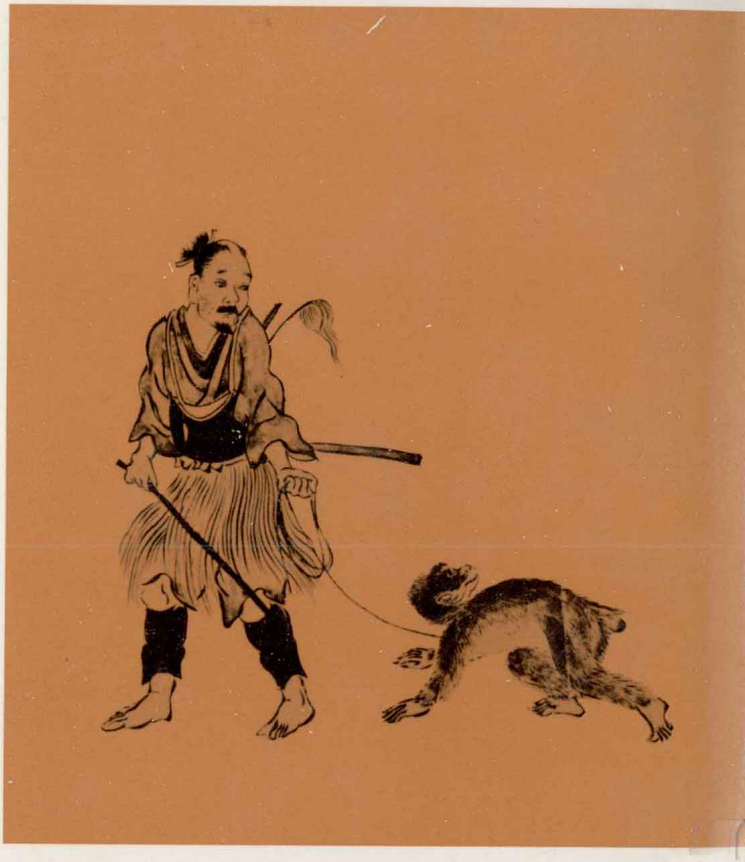
職人歌合

中世の職人群像

後鳥羽院と慈円は,「職人」たちを仏道に結縁させようとの思いで, 彼らになり代って創作したのではなかったか。法会に参加し, 座を連ねたあかしと仮りにするのである。詠者にとってその行為は仏教的善根となるわけである。「職人歌合」は法楽の歌合ともいえよう。

岩崎佳枝



平凡社選書 114

岩崎佳枝（いわさきかえ）
1936年大阪府生。梅花女子大学文学部大学院修士課程修了。現在，梅花短期大学非常勤講師。専攻，日本中世文学・近世文学。著書『職人歌合絵の研究』（歌合絵研究会刊），共著『職人歌合総合索引』（赤尾照文堂），論文「『七十一番職人歌合』成立年時考」（『文学・語学』96号），「職人歌合の詠者たち」（『語文』41輯），「句題和歌の系譜」（『和歌文学研究』50号）など。

平凡社選書 114

職人歌合
——中世の職人群像——

1987年12月11日　初版第1刷発行

定　価　2300円

著　者　岩崎佳枝
発行者　下中直也
発行所　株式会社 平凡社
東京都千代田区三番町5番地
郵便番号 102　振替 東京 8-29639
電話　東京（03）-265-0471〔編集〕
（03）-265-0455〔営業〕

印　刷　東洋印刷株式会社
製　本　株式会社石津製本所

©Kae Iwasaki 1987 Printed in Japan
ISBN 4-582-84114-7
乱丁・落丁本のお取替えは直接読者サービス係までお送り下さい（送料は小社で負担します）

職人歌合

中世の職人群像

岩崎佳枝

平凡社

はしがき

「職人歌合」は、今日まで主として美術史家、歴史学者、科学技術史家の方々が注目し、絵画史、職人の生態・職能の変遷といった面からの考察がなされてきた。しかし国文学史的見地からの言及は殆ど見当らない。文学史の上では、たんに遊戯文学の一つとしてかたづけられ重視されていなかったといえよう。「職人歌合」の詠歌は「職人」語を主軸に、縁語・懸詞を駆使した技巧的な表現が用いられていて難解である。国文学的視点からの綿密な考究、さらには学際的な総合研究を必要とする。それによって解明が遅れている中世「職人」の実態究明が飛躍的に進むことであろう。

本書では、まず「職人歌合」の成立の問題、ことに制作された年代の解明に意を注ぎ、詠者や判者の特定にも努めた。その結果、従来漠然と鎌倉期、あるいは室町後期としかいわれなかったものの制作年時をほぼ確定することができたと思う。室町期のものには、実は三条西実隆や飛鳥井雅康らがそれらの企画に加わり、出詠していたのである。次に「職人歌合」に見る「職人」たちの世界の解明、すなわち「職人」の実態に照明をあてた。歌合全体に留意しながらも主として異色の「職

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人」を取りあげ、彼等の職種の実態や生活・心情、生業に勤しむ庶民の哀歓といったものを明らかにすることを試みた。加えて、文学作品としての「職人歌合」にはいかなる特色が見られるものか、主として「職人」歌の構造についても考察した。「職人」語という特殊な用語や詠風の問題、正統的和歌を尊重する判者の立場などから、「職人歌合」は、文学史的に見て、俳諧歌・狂歌というよりはむしろ異体の和歌とすべきであると考えられる。さらに、なぜこのような異色の文学・絵巻物が制作されたのかがもっとも疑問とされるところである。そこには天皇・摂関家と「職人」との結びつき、その背後にある宗教的事情といったものが浮上してくる。

小著はこれら数々の問題を内包する「職人歌合」に、主として国文学的立場からアプローチを試みたものである。「職人歌合」は特殊な文学作品であり、残された課題も少なくない。本書が、中世「職人」の文学と世界への究明の手がかりともなれば幸いである。

目次

はしがき

第一章　「職人歌合」の魅力　9

「職人歌合」の魅力　中世の四種五作品　鮮やかな「職人」像　「職人」の登場
結縁と鎮魂　実像の文学

第二章　「職人歌合」の成立　31

一　「職人歌合」の水源――『東北院職人歌合』　34

東北院と九月十三夜　ことさらな称讃と敬語　後鳥羽院・慈円と「職人」たち
花園天皇の書写　五番本から十二番本へ　改められた歌

二　辛酉の年の歌合――『鶴岡放生会職人歌合』　61

鶴岡八幡宮の「職人」たち　菟園の御行粧　弘長元年の盛儀　鎌倉歌壇の隆盛
革命の年と後鳥羽院の怨霊　判詞と漢籍　判詞の中に見える故事

三　維摩経と水無瀬神――『三十二番職人歌合』　81
特異な「職人歌合」　はやり仏、谷の観音　弁説上人と維摩居士　禅と念仏
四季の並び　制作者たち　「表補絵師」の代詠者　吉野山に縁りの判者
乱世と後鳥羽院
四　『白氏文集』と代替り――『七十一番職人歌合』　114
七十一番の「職人」たち　明応九年の世情　『白氏文集』と「あまり」
飛鳥井雅康の「職人歌」　絵と画中詞　法楽の歌合
第三章　「職人歌合」の世界　143
一　番いとなる「職人」たち　148
番いが示唆するもの　固く結ばれた番い　組み換えられた番い
時代の推移を反映する組み換え
二　異色の「職人」群像　161
工人たち　「売らう売るまひ」　宗教者・芸能者

三　画中詞に見える「職人」たち　214
画中詞の効果　番いの会話　受注のことばと物売りの声　玄人の技
はやりとさわり
四　「職人」の土地　230
土地を告げることば　洛中に住む「職人」たち　行商人たちの里
地方の「職人」たち　「職人歌合」に見える寺社
第四章　「職人歌合」の文学性　259
俗を雅でくるむ　判者の眼　『三十二番』の場合　俗を照らす雅
諸本研究　279
『東北院職人歌合』五番本　『東北院職人歌合』十二番本
『三十二番職人歌合』　『七十一番職人歌合』
あとがき　297

本書の「職人歌合」各作品よりの詞章の引用は、以下を底本とした。
また図版は以下を用いた。

『東北院職人歌合』五番本　詞—高松宮家本（文化庁蔵）
図—曼殊院本（東京国立博物館蔵）

『東北院職人歌合』十二番本　詞—陽明文庫蔵本
図—大東急記念文庫蔵本

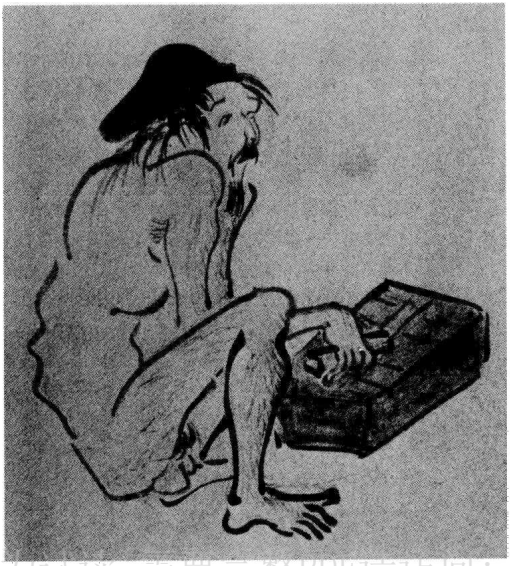
『鶴岡放生会職人歌合』　詞・図—松下幸之助氏蔵本

『三十二番職人歌合』　詞・図—天理図書館蔵本

『七十一番職人歌合』　詞・図—群書類従版本

ただし、底本の文意の通じない部分については、他本により最小限の校訂・改訂を施した。また句読点・濁点を付し、読みにくい漢字にはふりがなをつけた。図版で右記以外を用いた場合はその旨を記した。

第一章　「職人歌合」の魅力



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

前頁の図版は『東北院職人歌合』五番本の「巫・博打」。現在の目からは少し奇異に思われるペアであるが，中世では賽を振ることには神意を占う呪力があると考えられていた。双六で賽を振る博奕打と神託を告げる口寄巫女は，両者とも流浪の民である上に，神意を窺うという共通性があった。年老いて妖気が漂よう「巫」の様や，賭けに負けたのか，まる裸で陰部まで露わな「博打」の姿は，「職人歌合」の目を魅く力を如実に示している。

月に寝ぬ宿とや人のおもふらんいつもたえせぬ相鎚のおと　（左「鍛冶」）
すみかねのなをりをただす身なれどもかたぶく月に勾張ぞなき　（右「番匠」）

左、なだらかに侍。たゞし大かたのやどならひによまれたり。右、詞つゞきよろしく侍。かたぶく月とよまれたる、いかが侍覧。月の歌をばさかりによむべきとぞふるき歌合にも申たる。これかれなぞらへて持にや侍らん。

歌の詞つづきや詠歌の後の詞章に、読者は従来読み馴れた和歌とは違った印象をもたれたのではないかと思う。これは『東北院職人歌合』の「鍛冶」と「番匠」の歌及びその「判詞」である。

日本文学の伝統の中に「歌合」という文学的遊戯がある。左右二方に分かれた詠者たちが同じ題で和歌を詠み、二首一番の取組を作り、その優劣を競うものである。勝負の判定は歌合参加者全員による衆議判もあるが、一般的には特定の人物が判者となって下す。歌に付した「左」「右」は取組

の左方と右方の謂いであり、また「判詞」とはいうまでもなく歌の優劣・可否を判定して述べることばのことである。

現存最古の歌合は、仁和年間（八八五―八八九）披講の「民部卿家歌合」で、歌合の源流は九世紀後半あたりにあることになる。初期の歌合は菊合、女郎花合など「物合」に付随して行われていた。その後、宮廷などを中心に「天徳四年内裏歌合」（九六〇）など、行事様式を完備した晴儀の歌合が盛んとなる。さらに平安後期には、判詞に陳状が加えられるなど歌論も発展し、『六百番歌合』『千五百番歌合』などが生まれた。鎌倉期に入ってからは勝負にいっそう重点が置かれ、歌人も判者も独自の創作法・歌論をもって対処するようになっていくが、その一方で、詩歌合、物語歌歌合、年中行事歌合など趣向をこらした歌合も現れてきた。そしてやがて『東北院職人歌合』をはじめとする異色の歌合、「職人歌合」が登場することになる。

「職人歌合」の魅力

「職人歌合」とは、「職人」たちが左右に分かれて競う歌合である。詠題は、多くが「月」と「恋」であり、「花」と「述懐」とするものもある。引用した「鍛冶」「番匠」の歌は、「月」を詠題としている。

「鍛冶」の歌、「番匠」の歌といっても、もちろん、その道々にはげむ職人たちが詠吟したものでは

ない。実際の詠者は上層貴族である。彼等が「職人」たちになり代って詠んだ代詠歌なのである。しかし「職人歌合」の詠歌には、中世「職人」の生活や心情が見事に織り込まれており、この時代に生きた民衆の社会と歴史を現代に伝えてくれる貴重な文学作品といえるのである。

例えば「鍛冶」の歌、「月に寝ぬ宿とや人のおもふらんいつもたえせぬ相鎚のおと」は、「月があまりに美しいので、寝ないで月を賞でる宿と人は思うであろうが、実は昼も夜も相鎚の音が絶えない宿、夜を徹して仕事をせねばならない鍛冶の我が身であることよ」というのであろう。

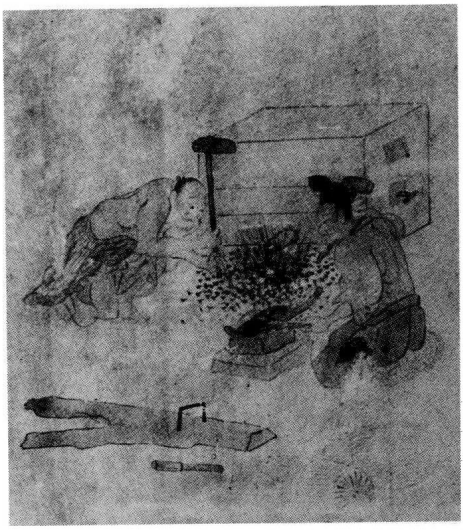
一方、右の「番匠」の詠歌「すみかねのなをりをただす身なれどもかたぶく月に勾張ぞなき」も、やはり風流に縁のない身を歎く。歌意は、「番匠である私は、墨と曲尺で建物のまがりを正す身であるが、傾く月を倒れぬように支える棒は持ち合わせていない」ということになる。判者は左の歌を、歌の姿はなだらかでよいが「大かたのやどならひによまれたり」と批判する。月光がさし込む家で月見をするというのは当りまえのことで、発想が新鮮さに乏しいと指摘するのである。また右の歌についても、「詞つゞき」は良いとしながらも「かたぶく月とよまれたる、いかゞ侍覧」と疑義を呈す。古い「歌合」でも、月の歌はその盛りを詠むべきであるとしており、月を題とする歌合で傾く月を詠んだのはいかがだろうか、というのである。このように、左右の歌には欠点があり、「かれこれなぞらへて」、つまり双方比べて「持」であるとする。引分けの判定である。

判者の判定はさておき、詠歌について注目したいのは、歌全体から読みとれる「職人」の営みや

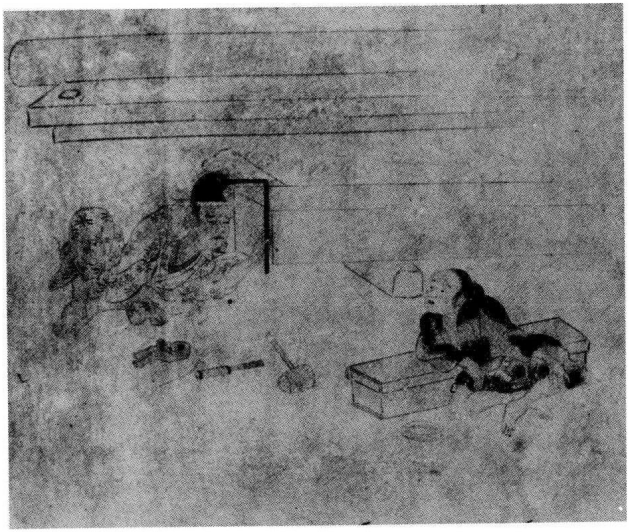
心情とともに、その用語についてである。例えば「鍛冶」の歌では「あひづち」（相鎚）、「番匠」の歌では「すみかね」（墨と曲尺）、「こうばり」（勾張）といった、職種に関連の深い言葉が使われている。これら「職人」語彙を詠み込むことは、身を「職人」に准えて詠吟するこの歌合には不可欠なことであり、すべての詠歌には何らかの「職人」語彙が組み込まれている。歌を吟味し勝負を下す判詞にも、当然それらの特殊な語彙が現れてこよう。これらのことばもまた、中世「職人」たちの生態を知る上での一助となろう。

「職人歌合」の魅力をさらに高めているのは、それが詠み手（「職人」）を絵に仕立てた歌仙絵形式をとっていることである。歌合のひと番いごとに、詠者すなわち「職人」たちの姿絵を載せ、作業姿や工房の様子、用具・商品などが彩色で描き込まれている。「職人」の表情もさることながら、周囲に配された用具などには今日では目にすることのできないものもある。絵巻に描かれたこれら色彩豊かな画像を追うだけでも興味は尽きない。そして、これらの歌や判詞、画像、また後述する画中の詞（画中詞）を合わせ読み、子細に観ることにより、日本中世の「職人」たちの世界が、鮮やかに甦り、生々しく迫ってくるのである。

ところで、ここにいう「職人」とは、現在いうところの〝職人〟よりもずっと広い職種を指している。手工業や工芸を営む工人に加えて、賈人（商人）はもちろん、生産や流通に直接携わらない芸能人や宗教人も含まれる。少ないもので十、多いものでは百四十二もの職種を登場させている「職



『東北院職人歌合』五番本の「鍛冶」(上)と「番匠」(高松宮家本，文化庁蔵)



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com